

**1. はじめに** 建築づくり・街づくりにおいて、社会に対しては、脱成長、人間中心、理念理想、といった論調が沸き上がっているものの、なかなか先に進まないのが現状といえる。また、現行の改善として技術のイノベや技術倫理の履行などが真っ先に考えられているが、これらは今の社会システムの枠内に留まっているようにも見える。その一方では、そうした閉塞的な状況改善のためとして、現状の枠組みを超えて(技術や社会システムを超越して)、哲学思考が必要という新しい潮流もみられるようになってきた。

そこでここでは、技術社会における現状の乗り越えと次への前進について枠外思考のもと理屈化することにした。対象は(技術社会として)生活の営みからの延長を中心とした建築・街づくりである。論の遂行には、過度の効率化の見直し、理想理念による方向付け、生活次元からの哲学、数値・数量化背後の見直し、に着目して、枠越えを必要とする現状を把握し、枠越えの理屈を整理し、建築系における諸事象を考察するとした。なお建築系には市民生活、建築・街・都市を総称とした。

**2. 枠越えに込める** 枠越えとはいうなれば理想社会のつもりである。建築や街づくりにおいて、理想の設定が一足飛びにはできないことより、設定中という進行形の行為を枠越えとしてみたいものとした。さすれば、個々問題に対して理想の現実化を図るとして、個々毎に種々の理想的な様相が描くことができ、それを束ねた大きな意味での理想が進行形の形態となる。

**3. 成長路線のもとでは** 枠越えにおいて、今の時代を席卷する成長路線に言及したい。成長路線を運営する推進側でも程度の差こそあれ、枠越えではなくイノベが世の中に定着し、市場繁栄の社会において、市民層はその恩恵を受けていると考えている。要は、世の中金が回ることで市民層の活力が維持されることとして、推進側と市民の一体化(例えば生産者と消費者の相互信頼とか)がもちだされるのである。

確かに、推進側の先行、市民側の後行というシステムにおいては、生産・消費や企画運営・利用享受等の行為が社会運営そのものとなっており、成長路線促進が世の中を華々しくさせている。しかし、先行側と後行側との間には相互に作用しあうことが不十分であり、種々の問題が発生しているのも事実である。格差問題の一面もその類いといえる。

では、相互に作用しあうとは、そもそも推進側と市民の一体的な関係性をいうなら、後行に比して先行主導があまりにも支配的であることに何らかの対応が必要と考える。加えて、市民層が社会に二次的参加の様相となる雰囲気はぬぐいきれない。こうなると、そこには市民が主人公などとはいえないような疎遠さがあることになり、しかもそれがあたり前になってしまうことが新たな問題といえる。

**4. 哲学には** (1)枠越え； 世にいう「哲学に求める」の背景と

意味を検討する。まず背景としては、今の社会システムの枠組みの中では技術によるイノベでも根本的な改革にならず、枠越えに期待を込めて要求や願望・希望が沸き上がってこよう。そうして期待が高まる枠越えには、超えるものは人間と(人間主導の)システムという捉え方になるが、それは何かといえば哲学といえよう。実際には、工学における有識者や専門家の間では、哲学とせずに倫理とすることがほとんどである。

(2)哲学と倫理； 建築学会の多々委員会には、倫理委員会があっても哲学委員会はない。なぜか。倫理は建築の土台に基づいて組み立てることを前提としているのであろうが、哲学は全く工学を離れてしまう様相を持っているからかと思える。

(3)哲学の根本命題； 「人間とは何か」について古代から継続している最大命題については、今ある社会をどうつくり生きていったことがややもすると世俗的と捉えられるのであろうか。これには、対象の不確定性として位置づけ、確定性社会における各種の問題への取り組みありとしたい。

(4)哲学の現実対応細分化； 哲学界においては、人間とは、社会とはが根源的基本命題だが、今の時代には、論議対象を人間、技術、社会、等と区分して、現実の科学体形に合わせるようになってきて、建築哲学、技術哲学、(哲学的心理学)等と細分化されている。あわせて人間を扱う対象を倫理としての枠組みが定着しているので、従来の哲学は機能を失って「哲学は死んだ」といわれているほどである。それでいいのであろうか。我らは目的化された哲学をも乗り越える根本哲学を求めていると思う。

(5)求められる哲学； 我らの哲学は如何にあるべきか。今日社会では今の状態を基準にマイクロもマクロも追及されていると捉えることにして、今の状態を今の社会そのものではなく、新たな理想の社会に設定しなおすという行為が、哲学の根幹になると思える。これが枠越えといいたい。

(6)工学界における哲学； 工学体系を足元に哲学まで論究する研究者も少なからず健在である。彼らは「工学が人間とのかかわりの体系であることを重く見て、工学は社会学といった捉え方をする」ので、社会学の背後に哲学有として哲学を何とか工学体系に引き込みたいといった願望をお持ちである。

では、枠越えを希望の多くの方々の考えはどう考えるのであろうか。それはいわゆる哲学体系の哲学ではなく、むしろ哲学に「生活からの思考」というイメージを持たせたい。だからこそ、こうした考えに応える哲学とは何か、として(難解な哲学論理でなく)市民向けの哲学(哲学的思考)が形成されよう。

(7)工学と哲学； 枠越えの主張には哲学待望論があるが、哲学だけにすべてを託すわけではなく、枠越えの旗印のもと、フィードバックとして工学に立ち返るということはいうまでもない。あくまでも工学の世界なら、技術は今の状況において最善を尽くすという最大使命を大切にすることも、その先も考えることも責務としたいからである。

**5. 理念理想の土壌** 枠超えには何らかしらの方向性もあろう。その一つに理念理想を掲げたい。理念理想については著者も以前から挑戦している。関心事は「理念理想とは何か、どうやってつくるのか」である。ここで理念は何に基礎置かか考えてみる。

理念理想論議には二形態があろう。第一は、最初に理念理想を過去の遺産や議論を受け継いで、ア priori に構成する形態である。第二は、各種の問題において理念理想を念頭に小出しのアイデアを含めた討論によりもまれていく形態である。著者は、こうした議論が多くの方々もとでなされることにより、社会全体へのボトムアップにつながると考えている。

**6. 効率化の再考** 成長路線に疑義を唱える方々は多いが、実際は大きな力にはなっていない。なぜか。脱成長を支える事象が十分に検討されていないからである。ここでは理念追求トーンを下げたレベルで成長路線構成の効率化と管理に着目した。  
・効率化(過度の効率重視)には人間的な対応ができないと考える。効率化とは諸元層の構成について、一つの目標に向かって余分なことを削除や切り落としを図ることである。工学における問題対処についてのモデル化に際し、そのようなことが多々行われており、その都度、何らかの対処が必要と叫ばれている。これには一般人にとって賛同が得やすいと考える。なぜなら、モデル化に際してのスリム化の過程を皆さんが目当たりしにしているからである。ここに、もし思考に余裕があれば、種々諸事項を取り上げることも可能であり、スマート化という行き過ぎる効率化に異を唱え行動につながるようになるであろう。

**7. 数値・数量化背後の検討** 世の中は数量化世界である。数量・数値は、種々管理に、現象解明に、物事理解に、他、枚挙にいとまがない。数値・数量のメリットは莫大であり、生活充実を図ってくれる。しかしながら問題がないわけではなく、数値・数量の便利さや絶対さにより、何のための誰のためのといった視点が割合狭く意図的であることを指摘したい。以下、論議する。  
**(1)数量世界；** 世の中の諸現象が数値化され、数量で物事の満足度や効果度が推し量られているのは周知の如くである。

しかしながら、例えば人間行動を対象とした数量・数値化においては、モデル化そのものと人間行動の数値によるきめつけ評価が問題であり、時には人間の感性・感情の本質が数値によりないがしろにされがちである。(感性は数量でなく感である)

数値結果とは設定されたモデルのものであり、モデル設定時の恣意性が結果に反映されてしまうこともあり、何よりも数値先行で人側様は何も考えなくてもいいようになり、結果として数値万能、効率化万能にならされてしまう。

**(2)生活において；** 慣らされてしまうといえ、社会全体のシステムがそのように構成されているので、慣らされは当然である。よしんばこれに抗しても、諦めが生でくるだけである。特に、教育における効率優先は管理化と相まって、留まるところを知らないかのようである。幸いなことに、教育のあるべき姿を追求する活力が沸き上がろうとしているだけに、多くを期待したいところである。

**8. 建築(住宅)では** 最近、SDGs の観点から、環境工学的な対処が省エネやエネルギー効率向上を目指して、これまでの高気

密高断熱に加えて電力についても太陽光パネルや車バッテリーとの連動が加速している。しかしながら、これらは人工エネルギー消費を前提としている。人工エネルギーもいいが、自然対応の住まい方として、過去の伝統技術にもっと対応や追求すべきではと思う次第である。事が起されば事で対応、技術で対応、エネルギーで対応、といった姿勢がかくも強いとは恐れ入る。便利さも多少の不便あつてのもの。この二律思考(便利と不便)が人間性を喚起するように思えるし、大きな意味で技術(近代技術)対応もまた二律対応としての道を探ることが求められよう。さすれば技術万能といった方向も変わってこよう。なお、街づくりでは、技術よりも住民のコミュニティ力が肝要としている。

**9. 哲学の津々浦々広がり** 個人レベルでの哲学運用を扱う。

**(1)建築の専門家；** 建築専門家の中でも哲学愛好家は多い。建築は哲学と相通じるし、新たな理論やデザイン構築の拠り所として哲学(理屈付けそのものが哲学)があるということである。ここで、建築の職種ごとに考えてみる。

・設計系や計画系では、関わる方々の理念やデザインソースを哲学と称して概念化や新たな創作として思考の体系に哲学があるとされている。

・構造系や環境系では、対象は人間系であってもアプローチは科学的であり、哲学は入り込む余地なしのところを、哲学愛好家各位は、「仕事遂行は人間である以上、哲学は不可欠」とか、「科学的アプローチ結果の吟味についても視野拡大としても人間判断があれば、その根底に哲学あり」とか、主張され、研究・教育・実務にいかんなく発揮されてこようとしている。

**(2)平場の哲学論争；** 市民と専門家には哲学ファンが多く、各地に散在する論議の場として哲学カフェが大いに賑わっている。そこには、古典的な哲学論争あり、人新世の論議あり。平場とはいえ、関心ある方々の熱い論議が全国に少ないながらもあるという事実は市民力向上そのものとして重く受け止めたい。

**10. おわりに** 現状を越(超)えるいわば枠超えに向けたための基礎検討として、技術(建築と街)は如何にあるべきかを念頭に、枠超えの背後や構成について議論をした。以下にまとめる。

(1) 枠超えの構成；理想理念による方向付け、生活次元からの哲学、過度の効率化(数値・数量化背後)の見直しの4構成あり。

(2) 今を変える哲学について、今の枠組みを超えるロジックを哲学と位置づけ。社会の意識には市民感覚を基本とする。

(3) 脱成長の理屈には効率化と数量化が根幹となるとして、問題解決に際し日常生活からも市民感覚で取り組めるものとした。

(4) 哲学は枠超えで自由奔放に考える気楽な系と考え、多くの声が発せられることを目指すとした。

(5) 生活の延長、地域の街づくりの延長が都市づくりとして、個々の論が息づくコモンの改変を中心に枠超えの枠組みあり。

▲以上をもって新たなパラダイムの実現に向けた一歩としたい。なお、本稿はこれまで続けている市民主導街づくり論の一環のもの。市民感性が高度技術社会においてより強力になるには、その理屈は、について言及。

**謝辞；** 本稿は多数の方々との直接討議に基づいている。各位には謝意を表す。